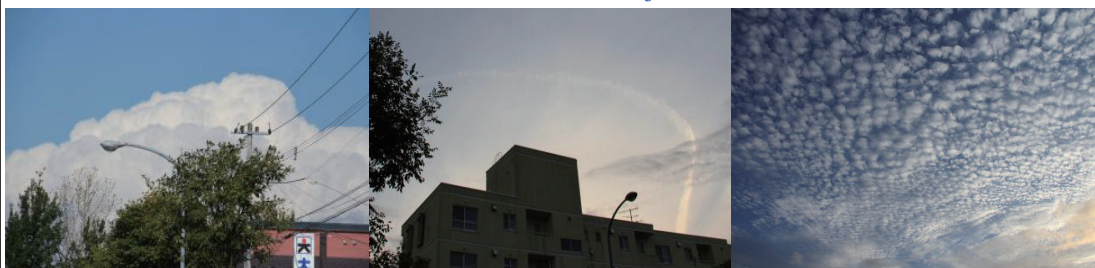




数学検定3級合格の斗内君(鶴居中) 中3生の学力Bテスト対策授業 最後のCテストは11/9 入試まで18週



5期生の子供のいよちゃんと 6期生の菅原君、仕事よりJC? 14期生の江口さんと中村さん



今年の夏は異常で釧路も暑い日が続き大変でした。乱雲や普段あまり見ない雲も 見られました。



霧多布湿原(琵琶展望台から)と花咲港のさんま船と風力発電 塾の前が紅葉になり気温も下がってきたので風邪に注意!

『漢検・数検・学力・定期テスト!』

11月になりました。今月は2日に漢字検定、中3は3日が道コン・9日は学力C、17日は数検そして定期テストと、検定やテストが続きます。

漢検に備えての特訓や宿題の直し(中3)で毎日のように塾に来てもらっています。定期テスト対策の1000分特講も10・11日(希望者)にあります。裏面の朝日新聞の社説の記事のように釧路市は全国的に注目されるような大変な状況にあります。

これから先、更に状況が悪化することが予想されます。今、一生懸命やってもやらなくても何も起こりません。しかし、近い将来必ずその結果が自分に返ってきます。将来に向けて、目標を持ち日々努力することです。

ステップゼミナールには今年、高校生が10名以上います。今までに無かったことです。このことでも

わかるように高校入試のために勉強するのではないのです。どの高校に入れるかではないのです。楽な道を選択して得をすることは無いのです。

裏面のニューヨーク・ヤンキースの黒田投手の記事を読んで下さい。どれ程努力し、どれ程理不尽な状況に耐えて自分の目標や夢を実現したのかを。

2、3日前、山口県の塾の先生と話をしたとき、挨拶は出来ない、平気で遅刻をする、責任感の無さ、学力以前に意識の低さを嘆き、日本全国、同じような状態だと言っていました。

無気力、無関心は建前論の社会や教育、そして過保護に原因があります。益々厳しくなる実社会で、将来自立して生きていける子供たちに育てるのは大人の責任です。

『育英塾だよりから!』

宮沢賢治の「雨にも負けず」の直筆のコピーをステップゼミナールの石坂塾長からいただきました

た。賢治が手帳に書いたもの(これは様々な本に載っています)、を巻紙に印刷したものです。平かなではなく、カタカナなので小学生にはとても読みにくいのですが、写真のように、子供達は興味津々です。

やはり、写真やテレビ上、ネット上ではなく、実物を見ることが大切とか、刺激というものはありますね。



石坂塾長は、9月、震災の被災地に奥さんと二人の孫ではないけれども孫同然の中学生二人を連れ、何とフェリーを利用して車で行ってきました。5月にも一人で、やはり車で行ってきています。すごい行動力です。私も体がこんなでなければ同行したいと思いましたが、

二回目に訪れた被災地は、一回目と何ら変わって

天声人語

「LOVE」と「LIKE」は、どう違うのか。何で読んだか思い出せないのだが、ある説明に感心して書き留めたことがある。LOVEは異質なものを求め、LIKEは同質なものを求める心の作用なのだ。辞書的に正しいかはおいて、なるほどと思わせる。言われてみれば「愛」には不安定な揺らぎがあり、「好き」にはどこか安定がある。その安定感、自分と同じものを相手に見だした心地良さかもしれない。そんなあれこれを、群馬のいじめのニュースに思い巡らせた。自殺した小の少女は、仲良し同士が集まる給食の時間に独りで食べていたそうだ。報道を機に、東京の声欄に「好きな子グループ」への意見がいくつも載った。都内の主婦は「好きな子同士で固まっていな」とみじめなんだ」という娘の胸中を記していた。同調圧力、という心理学の言葉を、最近よく耳にする。集団の中で多数派に合わせるを強いる空気のことだ。この「力」が、子どもや若者の間で強まる傾向らしい。▼これは仲間外れを恐れて、用心深くグループに合わせる。ベネッセの調査によれば小学男女の半数は一語を合せている。そうだ。自分を安全地帯に置く言動と、異質な者の排除は、意図はなくても表と裏の危うい間柄にある。▼同調圧力の強まりは、はじかれた者への想像力を殺さう。冒頭の定義に従うなら、ひいては「愛」を失うことにもなる。LIKEを悪者にする気はないが、用心はいる。子どもだけではない。大人はなおのこと胸に留めたい。

ていなかっただけです。復興など、ほんの一部の地域の話だそう、瓦礫はほぼ手付かずの状態でした。孫(?)を連れて行ったのは、子どもたちも見ておくべきだと思いついたからです。訪れた記念にと、花巻出身の賢治の記念館を訪れ、育英塾の生徒のために買って来てくれました。ステップゼミナールでも教室の入り口に貼ってあります。

『LOVEとLIKEの違い!』

英単語の話ではありません。左上の天声人語は、2年前の2010年11月10日のもので、筆者と同じようになるほど思い載せました。

コミュニケーションが苦手な若者、好きな同士が固まり、他を無視したり、疎外する場面はよくある。集団の中になければ不安になる、本当の意味での仲間意識ではない。自分に自信を持ってないから集団の中にいる事で安心する。

「メダカは群れる」のだ。群れの中で埋もれるより、自分の個性を大事にし、他人を思いやる正義感と責任感があれば、一人でも怖くはないし必ず友達も出来る。

※1000分特講10日は1時から8時、11日は9時から6時です。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木
			★鶴居定期テスト		休塾	■中三特講	■中三特講	★美原定期テスト		★鳥取・鳥取西定期テスト		休塾	★青陵定期テスト	★富原・遠矢定期テスト					★1000分特講	★1000分特講	■学力Cテスト					休塾	■漢字検定		
			★鶴居定期テスト		休塾	■中三特講	■中三特講	★美原定期テスト		★鳥取・鳥取西定期テスト		休塾	★青陵定期テスト	★富原・遠矢定期テスト					★1000分特講	★1000分特講	■学力Cテスト					休塾	■漢字検定		

11月の予定

■ NYも驚愕！「熱い屋根の上で正座」■

黒田が米紙に語った仰天エピソードの数々

ヤンキース首脳陣は、今季シーズン中盤から黒田博樹投手（37）に絶大な信頼を寄せるようになったそうだ。

きっかけは、黒田が少年時代に体験した日本式しごきトレーニングの実態を地元紙に語ったことだった。メジャー屈指のスーパースター軍団も日本の野球地獄に驚愕し、筆舌に尽くしがたい苦境を乗り越えた黒田の精神力に感服したというのだ。

「黒田が少年時代に置かれた環境は米国だったら犯罪になるのではないかと。最近、日本でも親が訴訟をおこすなど、状況は劇的に変わっているが、当時は児童虐待、いじめだった。黒田はしごきを体験した最後の世代だ」

今年7月、黒田をインタビューしたニューヨークタイムズ紙が、専門家の意見を交えてこう論評した。インタビュー記事のタイトルは「ヤンキースの黒田は痛みの中からつくられた」。黒田の粘投の秘密を解き明かす内容だったが、まるで黒田を地獄から這い上がった怪物のように伝えていた。

確かにこのインタビューでの黒田の告白は、グローバルスタンダードでは強烈だっただろう。水を飲むことが禁止されたまま、早朝から深夜までの練習、正座、ケツパット。およそ米国人には信じられない日本の野球カルチャーのオンパレードだったからだ。前近代的な野球練習を体験したことのある日本の熟年世代の元球児たちでも、驚かされる事実が並んでいた。

大阪・上宮高校時代、練習中にのどの渇きに耐えかねた選手たちが、監督の目を盗んで川や水たまり、トイレの水を飲んだエピソードは、異様な光景として同紙の中で紹介されている。

「そういう時代だったんでしょね。練習中に水は飲んではいけないと監督が信じていましたから。みんなよく気絶したものです。自分も川に水を飲みに行きました。きれいな川ではありませんでしたが、きれいだと信じたかったですね」（黒田）。

高校1年のとき、制球を乱して自滅したあと、罰走を命じられた場面も驚きだ。朝6時から午後9時まで、15時間連続で4日間走り続けたという。もちろん水を飲むのは禁止だった。

「野球を続けるためには、生き残らなくてはならなかったのです。そのためには免疫機能を鍛えるなければいけなかったですね。小学校のときから軍隊にいるみたいなもので、ミスをすればケツパット。次の日は椅子に座れない」（黒田）。

先輩に怒鳴られ、焼けた歩道に正座をさせられて殴られるのは日常茶飯事。専修大学へ進学してからは、4人部屋に詰め込まれ、下級生は早く起きて先輩の靴下を手洗いをしなければならなかった。

「大学1年生のときは基本的に奴隷です。洗濯ができていないと、今度は熱くなっている屋根の上に正座させられました。足の感覚がなくなり、はって部屋に帰ることになるのです」

米国ではスポーツは娯楽、が大前提。同紙は「ほとんど信じられない話ばかりだが、黒田は真顔ですべて本当だと言った。黒田にはマウンドで臆する様子がない。それも彼の歩んできた人生を考えれば当然かもしれない」と結んでいる。

昨オフ、ドジャースから強力打線のひしめくア・リーグに移籍した黒田は、開幕直後に負けが先行して苦戦した。しかし、持ち前の粘り強い投球で尻上がりに調子を上げた。7月にベテラン左腕ペティット、エース右腕サバシアが相次いで故障すると、その穴を埋めてチームを地区優勝に導いた。

黒田の少年時代のすさまじい野球経験を知り、ヤンキースの首脳陣の見る目も変わった。ジラルディ監督は「ヒロ（黒田）には経験がある。きっとやってくれるはずだ」とポストシーズンでも全幅の信頼をおいている。

「子供のときは野球が楽しいと思ったことはないです。もし試合で200球投げると言われたら、疲れるでしょうが、やると思います。そうやって教えられて来ましたから」と同紙に笑顔で答えた黒田。

その笑みがやけに穏やかであることにニューヨークは震え上がったのだった。

■生活保護から就労へ—まず「自尊感情」の回復を■

朝日新聞 10.22 社説より

生活保護を受ける人が210万人を超えた。かかる費用は年間3兆7千億円にもなる。高齢化の影響が大きい、問題はまだ働ける年齢層で受給者が増えていることだ。

社会の大きな変化が根本にある。経済のグローバル化が進んで、製造業の安定した仕事が少ない一方、低賃金の非正規雇用が増える。「黙々と勤めれば普通に生活できる」という前提自体が崩れている。

■北の街での試み

北海道釧路市を訪ねた。やはり経済の疲弊に苦しむ地方都市の一つである。

80年余りの歴史を持つ炭鉱が02年に閉山、製紙業は低迷し、漁業の水揚げはピーク時の10分の1に縮小……。地域経済の衰退と比例するように、生活保護を受ける人が増え続けた。

求人件数は、求職者のほぼ半分。季節労働の水産加工を除けば、受給者がすぐに就けそうな仕事はほとんどない。働くよう指導するだけのやり方は壁に当たっていた。

切羽詰まった状況で、市は生活保護のあり方を転換する。国のモデル事業として04年度、母子家庭の就労支援に取り組んだことがきっかけだった。

当事者が気持ちを動かさないと何も始まらない。そんな認識から、受給者が自分の存在を肯定できる「自尊感情の回復」をまず支援の中心に据えた。

NPOや企業に頼み込んで、就労体験的なボランティア活動をいくつも用意し、「中間的就労」と位置づけた。

動物園のエサづくりや公園の清掃、病院や介護施設での話し相手など、とにかく家の外に出て、人と関わる。

貧困で断ち切られた社会とのつながりを回復するのが最初の目的だ。

参加を呼びかける時も、「これぐらいならできようだろう」ではなく、「市民の一人としてまちづくりに力を貸して欲しい」と訴えた。

地域経済が回復しないなか、釧路市の受給者はなお増えてはいる。今年は約1万人。市民18人に1人という割合は、全国平均の3倍を越す。

だが、生活保護を受けつつ働く人の割合は増え、受給者の医療費も減った。釧路市の平均の保護費は月約12万円で、道内の同じ規模の市に比べ1.5万～2万円ほど低い。

厚生労働省は、生活が苦しい人たちの自立を支える「生活支援戦略」を検討している。

そこには二つの顔がある。

一つは早めに、幅広く、より手厚く支援する取り組みだ。いわば太陽の光で暖めて、やる気を取り戻してもらう。

もう一つは「北風」の引き締めだ。不正や無駄遣いを監視する権限を強化し、高齢でも病気でもない「働けるはずの人」には自ら健康を管理し、早く仕事につくよう指導を強める。

■引き締め策への懸念

釧路市のような中間的就労は「太陽政策」のひとつだろう。他の自治体でも様々な取り組みが進む。いずれも地域のNPOや企業との連携なしには成り立たない。

生活保護行政は、プライバシー保護を名目に、受給者を一般市民から見えにくい存在にしてきた。その殻を破って支援のプロセスを見えやすくし、外部とも連携して就労先を確保できるか。行政の決断と、市民活動の厚みが問われる。

心配なのは、引き締めだ。

制度への国民の信頼を保つためには、不正をチェックし、自立へ向けた本人の努力を促すことは必要なことだ。

ただ、運用次第では、むしろ自立を損ねる懸念がある。

たとえば、受給者にかわって行政が家賃を払ったり、保護費の支出の状況を細かく調べたりする権限の強化である。

家賃滞納の心配をなくして、保護費がパチンコや酒に使われるのを防ぐのが目的だ。自民党は、食費や洋服代の現物支給も検討している。

そうした権限が必要な場面はあるだろう。だが、受給者の状況とは関係なく、一律に監視や指導を強めれば、自立には逆効果になりかねない。

こうした引き締め策が議論される背景には「生活保護にただ乗りしている人間が大勢いる」という疑念の広がりがある。社会が余裕を失い、私たち自身が自尊感情を持ちにくい時代になったからかもしれない。

■自立への階段つくれ

このような視線にさらされる当事者は、かえって社会とのつながりを失い、引きこもり、ますます生活保護への依存度を強める恐れがある。

「やる気さえあれば、できるはずだ」とか、いきなり「仕事をしなさい」といっても、届かないロープに向かって飛べと言うようなものだ——。そんな現場の声に耳を傾けよう。就労による経済的自立までに階段を用意し、それを一歩ずつ上げるよう社会全体で手助けする。それが生活保護の肥大化を防ぐ近道ではないか。

これが全国でも注目される釧路市の現状です。

※ お知らせ 来年度（平成25年）から都合によりしばらくの間、富原中学校吹奏楽部の生徒の募集を停止します。